

エッセイスト **近藤 節夫**



モン・サン・ミッシェルの鳥観図（地続きの道路が見える）

第2次世界大戦の死命を制した連合軍による「史上最大の作戦」ノルマンディー上陸作戦が行われた、フランス北西部のオマハ海岸からほど遠からぬサン・ワロ湾の小島上に、威厳あるカトリック修道院モン・サン・ミッシェルは、1千年近くに亘って超然と聳え立っている。今や南米ペルーの世界遺産「マチュピチュ」と並ぶ世界的な人気観光地で、年間350万人もの人が訪れる。意外にもその内何と50万人が、日本人観光客なのである。厳島神社のある広島県廿日市市とは観光友好都市でもある。

海上にありながら「山の聖ミカエル」と名付けられたモン・サン・ミッシェルの晴れた日の青空とのコントラストが素晴らしく、「西洋の脅威」とも呼ばれるが、嵐の中でも月の出ない夜でも神のご加護を背に受け屹立している修道院は厳かで、近寄りたがいのものを感じる。夜明け、日中、夕暮れと陽が変化し魔法のように変わるバリュエーションとライトアップで夜空に浮かび上がるシルエットの絶景は、まさに秀逸ものでどれも見てみたい。

島の周囲約900m、尖塔の高さは170m。8世紀初めミカエル大天使の「この岩山に聖堂を建てよ」とのお告げにより、13世紀にほぼ現在の形に建造された。百年戦争時には英仏海峡を望む要塞として、フランス革命では修道院は廃止され監獄として使用されるなど、建物には数々の運命的な歴史の変遷が刻み込まれ、まさに多目的に活用された証が今も鮮明に残されている。

最上階には、回廊が備わり、そこには屋根がなく天を仰ぎホッとする芝生の空間である。ここから望める雄大な眺望は、一国の城主になったかの感がある。目の前の英仏海峡の向こうにはかつての仇敵大英帝国がおぼろげに見える。

近くには中世フランスの歴史と伝統が刻まれ味わいの

ある街々があり、訪れる人々の心を癒してくれる。石畳みと木組みの民家が風情を残しているセーヌ河口の街・名港オン・フルールと、カトリーヌ・ドゥヌーヴ主演映画「シェルプールの雨傘」の舞台としても知られたシェルプールなど歴史的にも情緒的にも落ち着いた街並みが見られる。これらを訪れてみれば、モン・サン・ミッシェルにより一層フランス中世都市の深みと奥床さが感じられる。

この辺りは、潮の干満の差が最も激しい所として知られ、潮の満ち引きの差は15m以上もある。19世紀末に対岸との間に地続きの道路が作られ、潮の干満に関係なく島へと渡れるようになった。しかし、これによって潮の流れが堰き止められることになり、100年間で2mもの砂が堆積してしまっ



対岸からの眺望

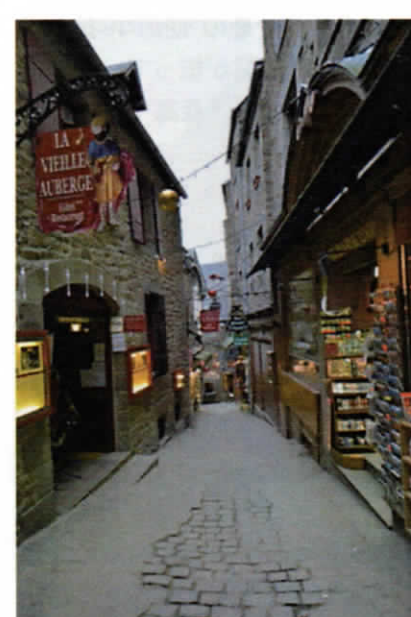


10年前に建設された橋

時に急速な陸地化が

島の周囲で進行し、島の間際まで潮が襲うことがほとんどなくなった。そのため昔の姿を取り戻そうとそれまであった地続きの道路が取り壊され、2014年になって漸く願いが叶い新たな橋が完成し、今では往来はいつでもできるようになった。

橋を渡って島へ入ったら商店街の立ち並ぶアーケード風の歩道を歩いて上る。上るにつれて勾配が急になる。途中の土産店やレストランの中で、ご当地の食べ物として「ラ・メール・プラール」のオムレツが有名で、ありきたりの食べ物のようなのだが、案外日本人の口にも合い、島を訪れたらぜひ立ち寄って食してみたい。その家伝のレシピは店では門外不出として決して教えてくれない。



一般的に日本人観光客は、フランスでパリ周辺から離れると比較的地中海沿岸のプロヴァンス地方を訪れるケースが多いが、機会があれば、ぜひとも北西部のモン・サン・ミッシェルをはじめ、ノルマンディー方面の魅力も訪ねてみたいものである。

島の入口と修道院を結ぶ狭い通路